

【齊紀十】 重光大荒落，一年。

■南齊、●北魏、「続国訳漢文大成 経子史部(8-269p) <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1239965>

和皇帝中興元年（辛巳，501年）

（和皇帝、諱は寶融、字は智昭、明帝の第八子）

■春，正月，丁酉（2日），東昏侯は晉安王の寶義を以て司徒と為し，建安王の寶寅を車騎將軍、開府儀同三司と為す。

■蕭衍は襄陽を發す 乙巳（10日），南康王の寶融は始めて相國を稱し，大赦す。蕭穎胄を以て左長史と為し，蕭衍を征東將軍と為し，楊公則（去年長沙を取り、任命）を湘州刺史と為す。戊申（13日），蕭衍は襄陽を發し，弟の偉を留めて府州事を總ぜしめ，儼をして壘城（壘を築いて大城に附近する）を守らしめ，府（征東府）司馬の莊丘黑をして樊城を守らしむ。衍は既に行き，州中の兵及び儲待（物資の蓄え）は皆な虚し。魏興太守の裴師仁、齊興太守の顏僧都は並びて衍の命を受けず，(8-270p) 舉兵して襄陽を襲わんと欲し，偉、儼は兵を遣わして始平（始平郡は武當県に倭置く、湖北省襄陽道均県の北、現・十堰市丹江口市、治平×）に邀撃して，大いに之を破り，雍州は乃ち安ず。

【魏主は若く、政治に苦慮】

●魏の咸陽王の禧の横暴と於烈の抵抗 魏の咸陽王の禧は上相（大尉で位は群臣の上にあり）と為り，政務に親^{みずか}らせず，驕奢貪淫にして，多く不法を為し，魏主は頗る之を惡む。禧は奴を遣わして領軍の於烈（續は于烈）に就き舊（舊の字は衍）羽林の虎賁（皇帝直屬の部隊）が，仗を執りて出入りせんとするを求む。烈は曰く、「天子は諒暗にてし，事は宰輔に歸す。領軍は但だ宿衛を典掌するを知るのみ，詔有るに非ざれば敢えて理に違いて私に従わず。」

禧の奴は惘然（志を失う態）として而して返す。禧は復た遣わして烈に謂って曰わしむ、

「我は、天子之子なり，天子の叔父なり，身は元輔と為り，求須（意の欲する所を須と為す）する所有れば，詔と何の異なるや！」

烈は厲色して曰く、

「烈は王之貴を知らざるに非ざる也，奈何して私奴を使わして天子の羽林を索めしむや！烈の頭を得る可くも，羽林を得る可からず！」

禧は怒り，烈を以て恆州刺史と為す。烈は外に出るを願わず，固く辭し，許さず。遂に疾と稱して出でず。

●魏主は諸王の統制に悩む 烈の子の左中郎將の忠は直閣を領し，常に魏主の左右に在り。烈は忠を使わして魏主に言つて曰く、

「諸王専恣にして，意は測る可からず。宜しく早く之を罷じ，自ら權綱を攬るべし。」

北海王の詳は亦た密かに禧の過惡を以て帝に白し，且つ言う、

「彭城王の勰は大いに人情（人望）を得たり。宜しく久しく輔政するべからず。」

帝は之を然りとす。

●魏主は諸王を招集し優遇 時に將に祔祭（天子が行う祭）せんとし，王公並びに廟の東坊に齋す。帝は夜於忠をして烈に語らしめ、

「明旦は入見せよ、當に處分する有り。」

質明（天がまさに明ける）、烈は至り。帝は烈に命じて直閣等六十餘人を將い、宣旨して禧、勲、詳を召し、衛送して帝の所に至らしむ。禧等は入りて光極殿（魏孝文帝太和十九年起す）に見ゆ、帝は曰く、

「恪（魏主の名前、諸父に対して謙遜して言う）は寡昧と雖も、忝なくも寶歷（皇位）を承ける。比 尫疹（このごろわんしん 背が曲がり発疹）を纏い、實に諸父に憑り、苟しくも視息を延ばし、奄ち三齡を渉る。諸父は歸遜すること殷勤にして、今便ち親ら百揆を攝せん。且く府司に還れ、當に別に處分すべし。」

又た勲に謂って曰く、

「頃來南北の務め（南の壽陽を攻め北の中山に治す）殷にして、仰ぎて沖操（謙虛の操）を遂ぐるを容さず。恪は是れ何人か、而して敢えて久しく先敕（高祖の遺勅）に違えん、今叔父高蹈之意を遂げん。」

勲は謝して曰く、

「陛下は孝恭にして、仰ぎて先詔に遵じ、上は睿明之美を成し、下は微臣之志を遂げしむ、今を感じ往を惟い、悲喜交々深し。」

庚戌（15日）、詔して勲は王を以て第に歸らしむ。禧は位（位を上げて実権を奪う）を太保（皇帝の守り役）に進める。詳は大將軍、錄尚書事と為す。（8-271p）尚書の清河の張彝、邢巒は處分の非常を聞き、亡げ走り、洛陽城を出でて、御史中尉の中山の甄琛の彈ずる所と為る。詔書して之を切責す。復た於烈を以て領軍と為し、仍ほ車騎大將軍を加え、是より長く禁中に直し、軍國の大事は、皆な焉に參ずるを得る。

●【年十六の魏主は親決能わず】魏主は時に年十六、庶務を親ら決す能わず、之を左右に委ねる。是に於いて幸臣の茹皓、趙郡王の仲興、上谷の寇猛、趙郡の趙修、南陽の趙邕及び外戚の高肇等は始めて事を用い、魏の政は浸し衰える。趙修は尤も親しく幸し、旬月の間に、累遷して光祿卿に至る。官を遷す毎に、帝は親ら其の宅に至り宴を設け、王公百官は皆な従う。

■辛亥（16日）、東昏侯は南郊に祀し、大赦す。

●【廣陵王の羽の固辞】丁巳（22日）、魏主は群臣を太極前殿に引見し、親政之意を以て告げ。壬戌（27日）、咸陽王の禧を以て太尉を領さしめ、廣陵王の羽を司徒（続、司×）と為す。魏主は羽を引いて内に入れ、面して之に授く。羽は固く辭して曰く、

「彦和（澎城王勲の字）は本自ら願わず（前年前卷にあり）、而るに陛下は強いて之を與へる。今新たに此の官を去りて而して臣を以て之に代わらしめば、必ず物議を招くべし。」

乃ち以て司空と為す。

■二月，乙丑（1日）、南康王は冠軍長史の王茂を以て江州刺史と為し、竟陵太守の曹景宗を郢州刺史と為し、邵陵王の寶修を荊州刺史と為す。

●甲戌（10日）、魏は大赦す。

【蕭衍は南康王を即位させる】

■壬午（18日）、東昏侯は羽林兵を遣わして雍州を撃ち、中外は纂嚴す。

■【蕭衍は竟陵に至り、作戰會議】甲申（20日）、蕭衍は竟陵に至り、王茂、曹景宗に命じて前軍と為し、中兵參國の張法安を以て竟陵城を守らしむ。茂等は漢口に至り、諸將は議して兵を並（続は併）せて郢を圍み、兵を分けて西陽、武昌を襲わんと欲す。衍は曰く、

「漢口は闊さ一里ならず、箭道（船は兩岸から射られる）は交々至り、房僧寄は重兵を以て固く守り、郢城と倚（引っ張る）角を為す。若し衆を悉して前進すれば、僧寄は必ず我の軍の後を絶ち、悔いて及ぶ所無し。若

し王、曹の諸軍を遣わして江を濟り、荊州軍と合わせ、以て郢城に逼るべし。吾は自ら魯山を圍み以て沔、漢を通じ、鄖城（安陸は春秋の鄖子の国、湖北省江漢道安陸県、現・孝感市安陸市）、竟陵（郢州長壽県は古の竟陵、湖北省襄陽道天門県の西北、現・天門市）之粟をして舟を方^{なら}べ而して下り、江陵、湘中之兵をして相い繼ぎ而して至ら使めば、兵は多く食は足り、何を兩城之拔かざるを憂えるや！天下之事は、以て臥して之を取る可からん耳。」乃ち茂等を使わして衆を帥いて江を濟り、九里（郢城を去る事九里の地）に頓せしむ。張冲は中兵參軍の陳光靜を遣わして開門して迎え戦わしめ、茂等は撃ちて之を破る。光靜は死し、冲は城に嬰^よりて自ら守る。景宗は遂に石橋浦に據り、連軍して相い續き、下って加湖（江夏の攝陽県の界に在り、湖は北より南江に注ぐ、郢城を去ること三十里）に至る。

■ 〔雍州兵も荊州の指揮下に入る〕 荊州は冠軍將軍の鄧元起、軍主の王世興、田安之を遣わして數千人を將して雍州の兵に夏首に於いて會す。衍は漢口城を築き以て魯山を守り、水軍主の義陽の張惠紹等に命じて江中を游過し、(8-272p) 郢、魯の二城の信使を絶たしむ。楊公則は湘州之衆を擧げて夏口に會す。蕭穎胄は荊州の諸軍に命じて皆な公則の節度を受けしめ、蕭穎達と雖も亦た焉に隸す。

■ 〔劉坦を行湘州事とし食糧調達〕 府朝（南康王は相国府を開く故）は議（続、儀×）し人を遣わして湘州の事を行わしめんと欲すも而して其の人を難じ、西中郎中兵參軍の劉坦は衆に謂って曰く、

「湘土の人情は、擾（乱）し易く信じ難し、武士を用いれば則ち百姓を浸漁せん、文士を用いれば則ち威略を振るえず。必ず一州を鎮靜し、軍民の食足りんと欲せば、老夫に逾ゆるは無し。」

乃ち坦を以て輔國長史、長沙太守と為し、湘州の事を行わしむ。坦は先に嘗て湘州に在り（客游せり）、多く舊恩あり、迎える者は路に屬^{つづ}く。下車し、事に堪える吏を選んで分けて十郡に詣らしむ、民を發して租米三十餘萬斛を運び以て荊、雍之軍を助け、是れに由り資糧は乏しからず。

■ 三月、蕭衍は鄧元起をして進みて南堂（郢城の南北にある射堂）の西渚に據らしめ、田安之をして城北に頓ししめ、王世興をして曲水の故城（郢府の官僚の祓禊の地、城東にあり）に頓せしむ。丁酉（3日）、張冲は病卒し、驍騎將軍の薛元嗣と冲の子の孜及び征虜長史（張冲は輔国將軍から征虜將軍になり、その長史）の江夏内史の程茂は共に郢城を守る。

■ 〔南康王は江陵にて皇帝即位〕 乙巳（11日）、南康王は江陵にて皇帝に即位し、改元し（中興元年）、大赦し、宗廟を、南北の郊、州府の城門を立つは悉く建康宮に依り、尚書五省を置き、南郡太守を以て尹と為し、蕭穎胄を以て尚書令と為し、蕭衍を左僕射と為し、晉安王の寶義を司空と為し、廬陵王の寶源を車騎將軍、開府儀同三司と為し、建安王の寶源を徐州刺史と為し（寶義・寶源・寶源は遙かに建康にあり）、散騎常侍の夏侯詳を中領軍と為し、冠軍將軍の蕭偉を雍州刺史と為す。丙午（12日）、詔して庶人の寶卷を封じて涪陵王と為す。乙酉（己酉なら15日）、尚書令の蕭穎胄を以て荊州刺史を行わしめ、蕭衍に征東大將軍、都督征討諸軍事を加え、黃鉞を假す。時に衍は楊口に次し、和帝は御史中丞の宗夬を遣わして軍を勞らわしめ。寧朔將軍の新野の庾域は宗夬に謂（続は馮）って曰く、

「黃鉞は未だ加わらず、侯伯を總帥する所以に非ず。」

夬は西台（江陵は西にあり）に返り、遂に是の命有り。薛元嗣は軍主の沈難當を遣わして輕軀數千を帥いて流れを亂して（流れを横切り）來戦し、張惠紹等は撃ちて之を擒とす。

■ 〔東昏侯は迎撃〕 癸丑（19日）、東昏侯は豫州刺史の陳伯之を以て江州刺史、假節、都督前鋒諸軍事と為し、西に荊、雍を撃たしむ。

■ 夏、四月、蕭衍は沔を出、王茂、蕭穎達等に命じて軍を進めて郢城に逼り、薛元嗣は敢えて出でず。諸將は之を攻めんと欲し、衍は許さず（持久して余力を以て郢魯二城を疲れさせんとする）。

●【惠王羽と馮俊興の妻の密通】魏の廣陵の惠王の羽は員外郎の馮俊興の妻に通じ、夜往きて、俊興の撃つ所と為り而して之を匿す。五月，壬子（19日），卒す。

【咸陽王禧の誅殺】

●【咸陽王の禧の反乱は漏洩】魏主は既に親ら政事し、嬖倖は權を^{ほしいまま}擅にし、王公は進見するを得るは希なり。咸陽王の禧の意は自ら安ぜず（^{まれ}続には未収録），（8-273P）齋帥の劉小苟は屢々禧に言つて雲う、
「天子の左右の人は禧を誅さんと欲すと言うを聞く。」

禧は益々懼れ、乃ち妃の兄の兼給事黃門侍郎の李伯尚、氏王の楊集始、楊靈祐、乞伏馬居等と反を謀る。帝の北邨に獵に出るに會して、禧は其の黨と城西の小宅に會し、兵を發して帝を襲わんと欲し、長子の通をして^{ひそか}竊に河内に入り、兵を擧げて相い應ぜ使む。乞伏馬居は禧を説いて、
「還りて洛城に入り、兵を勒して閉門すれば、天子は必ず北に桑干（北の魏の故地の平城）に走り、殿下は河橋を斷ちて、河南の天子と為る可し。」

衆情は前卻（^{ひそか}続は却、進むも退くも悩む）して壹ならず、禧の心は更に緩み、旦より晡に至り、猶豫して決まらず、遂に洩（^{ひそか}続は泄）らさざるを約して而して散る。楊集始は既に出で、即ち馳りて北邨に至り之を告げる。

●【魏主は陰謀を知り、於烈は帰還させる】直寢の苻承祖（馮太后の幸した宦官とは別人）、薛魏孫と禧は謀を通じ、是の日、帝は浮圖之陰に寝ね、魏孫は帝を弑せんと欲し、承祖は曰く、
「吾聞く、天を殺す者は身は當に癩を病すと。」

魏孫は乃ち止む。俄に而して帝は^き寤め、集始も亦た至る。帝の左右は皆な四出して禽を逐い、直衛は^{いくばく}幾も無く、倉猝にして出ずる所を知らず。左中郎將の於忠は曰く、

「臣の父の領軍は京城を留守し、計るに防遏する備え有り、必ず慮る所無からん。」

帝は忠を遣わして騎を馳せて之を觀さしめ、於烈は已に兵を分けて嚴しく備え、忠をして還り奏さ使めて曰く、

「臣は老なりと雖も、心力は猶ほ用う可し。此の^{ともがら}屬は猖狂（荒々しく常軌を逸した振る舞い）とも、慮と為すに足らず、願はくは陛下は蹕を清くして徐ろに還り、以て物望を安んすべし。」

帝は甚だ悦び、華林園（魏明帝の築く芳林園、後に齊王芳の諱を避けて改名）より宮に還り、於忠之背を撫でて曰く、
「卿は^{やや}差人の意を強くするや！」

●【咸陽王の禧の誅殺】禧は事露れるを知らず、姬妾及び左右と洪池（漢の鴻池、洛陽の東二十里）の別墅に宿し、劉小苟を遣わして啟を奉じて、雲う

「田收を檢行す。」

小苟は北邨に至り、已に軍人に逢い、小苟の赤衣を怪しみ、之を殺さんと欲す。小苟は困迫し、
「反を告げんと欲す」

と言ひ、乃ち之を^{ゆる}緩す。或るひとは禧に謂つて曰く、

「殿下が衆を集めて事を圖る、意を^{あらわ}見して而して停まる、恐らくは必ず漏洩せん、今夕は何んぞ宜しく自ら寛すべきや！」

禧は曰く、

「吾は此の身有り、應に自ら惜しむを知るべし、豈に人の言を待たんや！」

又た曰く、

「殿下の長子は已に河を濟り、兩つながら相い知らず、豈に慮する可からず！」

禧は曰く、

「吾は已に人を遣わして之を追う、計るに今應に還るべし。」

時に通は已に河内に入り、兵仗を列し、囚徒を放つ矣。於烈は直閣の叔孫侯を遣わして虎賁^{こほん}三百人を將して禧を収めしむ。禧は之を聞き、洪池より東南に走る、僮僕は數人に過ぎず、洛を濟り、柏谷塢に至り、追う兵は至り、之を擒にし、華林の都亭（華林門外にあり）に送る。帝は其の反狀を面詰し、壬戌（29日）、私第に於いて死を賜う。同謀の誅に伏す者は十餘人、諸子は皆な屬籍を絶ち、微に貲産、奴婢を給し、自餘の家財は悉く分けて高攀及び趙修之の家に賜い、其餘は内外の百官に賜い、流外（下級官吏）に於いて逮ぶ、^{およ}（8-274P）多き者は百餘匹、下は十匹に至る。禧の諸子は衣食乏しく、獨り彭城王の勰は屢々之に賑給す。河内太守の陸琇は禧の敗を聞き、禧の子の通の首を斬り送る。魏朝は琇が禧の未だ敗るる之前に於いて通を収め捕らざるを以て、其の情に通じるを責め、征（統は懲）して廷尉に詣らしめ、獄中に死す（陸叡は内禪を受けて初めに孝文帝の傳たり、その福澤は子に及ぶも、その子が敗れる）。帝は禧を以て故無く而して反し、是に由りて益々宗室を疏して忌む。

■巴西太守の魯休烈、巴東太守の蕭惠訓は蕭穎胄之命に従わず。惠訓は子の琬を遣わして兵を將いて穎胄を撃ち、穎胄は汝陽太守の劉孝慶を遣わして峽口（西陵の峽口なり、宜都の夷陵の界にあり、湖北省荊南道宜昌県、現・宜昌市西陵區）に屯ぜしめ、巴東太守の任漾之等と之を拒む。

■東昏侯は軍主の吳子陽、陳虎牙等十三軍を遣わして郢州を救わしめ、進んで巴口（巴水が江に注ぐ所、湖北省江漢道黃岡県、現・黃岡市黃州區）に屯す。虎牙は、伯之之子也。

【蕭衍の進軍と停滯】

■蕭衍は魏と結ばず独立作戰 六月，西台は衛尉の席闡文を遣わして蕭衍の軍を勞らい、蕭穎胄等の議を繼いで衍に謂って曰く、

「今兵を兩岸に屯し、軍を並べて郢を圍み、西陽、武昌を定め、江州を取らず、此の機は已に失う。救いを魏に請うに若くは莫し、北と連なり和すは、猶ほ上策と為す。」

衍は曰く、

「漢口の路は荊、雍に通じ、秦、梁を控引し（漢水を溯れば秦梁二州の刺史の治所の漢中に達す）、糧運資儲は、仰ぎて氣息を引く。兵にて漢口を壓し、^{あつ}數州を連結する所以なり。今若し軍を並（統は併）せて郢を圍み、又た兵を分けて前進すれば、魯山は必ず汚路を阻み、吾が咽喉を扼す。若し糧運通じざれば、自然に離散し、何を持久を謂うか？鄧元起は近ごろ三千の兵を以て往きて尋陽を取らんと欲し、彼が若し歡然として機を知らば、一説士にて足るかな矣。脱し王師を距がば、固より三千の兵の能く下す所に非らざる也。進退は據る無く、未だ其の可を見ず。西陽、武昌は、之を取れば即ち得るべし。然れども既に之を得るの後、即ち應に鎮守すべし。兩城を守らんと欲せば、萬人を減ぜず、糧儲は是れに稱い、^{かな}卒に出る所無し。脱し東軍の上る者有り、萬人を以て兩城を攻めれば（統により補充）、兩城、勢い、相い救うを得ず、若し我が軍を分けて應援すれば、則ち首尾は俱に弱し。^も如し其の遣わさざれば、孤城は必ず陷ちん、一城が既に沒せば、諸城は相い次いで土崩し、天下の大事は去る矣。若し郢州既に抜け、席捲して流れに沿えば、西陽、武昌は自然に風靡せん。何ぞ遽に兵を分けて衆を散じ、自ら憂患を貽さん乎！且つ丈夫は事を擧げて天歩（天道、詩經に「天歩艱難」とある）を清くせんと欲す、況んや數州之兵を擁して以て群小を誅すは、河を懸けて火に注ぐがごとく、奚ぞ滅びざる有らん！豈に北面して救いを戎狄に請い、以て天下に弱きを示す容けんや！彼は未だ必ず能く信ならず、徒らに丑聲（惡聲）^{いたず}を取り、此れ乃ち下計にして、何の上策と謂う

や！卿は我の輩と為り鎮軍（蕭穎胄は西台の尚書令で號鎮軍將軍を加える）に白せ。前途の攻取は、但だ以て付（附託）せ見れよ、事は目中に在り、捷たざるを患うる無く、但だ鎮軍が之を靖鎮するを借りる耳。」

■ **「房僧寄の病卒」** 吳子陽等は武口（武湖の水の江に出る口、安陸の延頭に通じる、湖北省江漢道黃陂縣の東南五十里、現・武漢市黃陂区）に進軍す。（8-275P）衍は軍主の**梁天惠**等に命じて漁湖城に屯ぜしめ、**唐修期**等をして白陽壘に屯ぜしめ、岸を夾んで之を待つ。**子陽**は加湖に進軍し、郢を去ること三十里、山に傍^{したが}い水を帶び、壘を築いて自ら固める。**子陽**は烽を挙げ、城内は亦た火を舉げて之に應ず。而して内外は各々自ら保ち、相い救う能わず。**房僧寄**の病に卒するに會して、衆は復た助防（防衛補助）の**張樂祖**（前後から孫樂祖では）を推して代わりに魯山を守らしむ。

■ **「廬陵・南康の攻防」** 蕭穎胄之初めて起つ也、弟の穎孚は建康より發（続は出亡）し、廬陵の民の**修靈祐**は之が為に兵を聚め、二千人を得、房陵を襲い、之に克ち、内史の**謝纂**（続は少し違う字）は豫章に奔る。穎胄は寧朔將軍の**范僧簡**を遣わして湘州より之に赴かしめ、**僧簡**は安成（吳の孫皓が豫章・廬陵・長沙を分けて安成郡を置く、江西省廬陵道安福縣、現・吉安市安福縣）を抜き、穎胄は**僧簡**を以て安成太守と為し、**穎孚**を以て廬陵内史と為す。**東昏侯**は軍主の**劉希祖**を遣わして三千人を將いて之を撃たしめ、南康（晉の置く郡、江西省贛南道贛縣の西南、現・贛州市南康区）太守の**王丹**は郡を以て**希祖**に應じる。**穎孚**は敗れ、長沙に奔り、尋ぎて病みて卒す。**謝纂**は復た郡に還る。**希祖**は攻めて安成を抜き、**范僧簡**を殺し、**東昏侯**は**希祖**を以て安成内史と為す。**修靈祐**は復た餘衆を合わせて**謝纂**を攻め、**纂**は敗走す。

■ **「東昏侯の芳樂苑造宮と潘貴妃」** **東昏侯**は芳樂苑を作り、山石は皆な五采を以て塗る。民家の好樹、美竹有るを望めば、則ち牆を毀し屋を撤して而して之を徙し、時に方に盛暑、隨いて即ち枯れ萎え、朝暮は相い繼ぐ。又た苑中に於いて市を立て、宮人、宦者をして共に裨販（裨は益、買うは賤しく売るは尊し、自ら裨益する）を為さしめ、**潘貴妃**を以て市令と為し、**東昏侯**は自ら市の録事と為り、小なく得失有れば、妃は則ち杖を與（続は予）える。乃ち虎賁に敕して大荊（杜荊）、實荻中（荻の実の中、撃つと痛い）に進むるを得ざらしむ。又た渠を開き埭を立て、身は自ら船を引き、或は坐して而して肉を屠^{ほふ}る。又た巫覡を好み、左右の**朱光尚**は

「鬼を見たり」

詐りて雲う。**東昏侯**は樂游苑に入り、人馬は忽ち驚き、以て**光尚**に問い、對えて曰く、

「向^{さき}に先帝を見る、大いに嗔^{いか}る、數々出るを許さず。」

東昏は大いに怒り、刀を抜いて**光尚**と之を尋ねる。既に見えず、乃ち菰を縛りて**高宗**の形と為し、北に向かいて之を斬り、首を苑門に懸ける。

■ **「東昏侯暗殺計画と王山沙の密告」** 崔慧景之敗るる也、巴陵王の**昭胄**、永新侯の**昭穎**は出でて台軍に投じ（前卷前年にあり）、各々王侯を以て第に還り、心は自ら安んぜず。竟陵王の子良の故の防閣桑偃は**梅蟲兒**の軍副^な為り、前の巴西太守の**蕭寅**と與に**昭胄**を立てんと謀る。**昭胄**は事克たば**寅**を用いて尚書左僕射、護軍と為すを許す。時に軍主の**胡松**は兵を將いて新亭に屯し、**寅**は人を遣わして之を説いて曰わしむ、

「昏人（帝が狂うを以て言う）の出でるを須^まち、**寅**等は兵を將いて**昭胄**を奉じて台に入り、閉城號令すれば、昏人は必ず還りて就かん。將軍は但だ壘を閉じて應ぜずんば、（8-276P）則ち三公を得るは足らざる也。」

松は許諾す。**東昏**の芳樂苑を新たに作るに會して、月を経るに出でて遊ばず。**偃**等は健兒百餘人を募り、萬春門より入りて、突きて之を取らんと議し、**昭胄**は以て可からずと為す。**偃**の同黨の**王山沙**は事久しくして成る無しを慮りて、事を以て御刀の**徐僧重**に告げる。**寅**は人を遣わして**山沙**を路に於いて殺し、吏は麝^{しや}麝^{しや}（麝香を盛る香囊）中に於いて其の事を得る。**昭胄**の兄弟と**偃**等は皆な伏して誅す。

■ **【東昏侯は反乱に担がれた寶寅を許す】** 雍州刺史の張欣泰は弟の前の始安内史の欣時と、密かに謀り、胡松及び前の南譙（晉孝武帝が淮南に立てた郡）太守の王靈秀、直閣將軍の鴻選等に結び、諸嬖倖を誅し、東昏を廢さんとす。東昏は中書舍人の馮元嗣を遣わして軍を監して郢を救わしむ。秋，七月，甲午（2日），茹法珍、梅蟲兒及び太子の右率の李居士、制局監の楊明泰、之を中興堂（宋の孝武帝は新亭にて即位し改名）に送り、欣泰等は人をして刀を懷にして座に於いて元嗣を斫ら使め、頭は菓^{わん}杵中に墜ち、又た明泰を斫り、其の腹を破る。蟲兒は傷ついて數瘡、手指は皆な墮つ。居士、法珍等は散り走りて台に還る。靈秀は石頭に詣りて建康王（建安王に作るべし）の寶寅を迎え、城中の將吏は見力（見在の兵力）を帥い、車輪を去り、寶寅を載せ、文武數百は警蹕^{けいひつ}を唱え、台城に向かう。百姓數千人（続は十人）は皆な空手して之に隨う。欣泰は事（続は車）作るを聞き、馬を馳せて宮に入り、法珍等が外に在り、東昏は盡く城中の處分を以て委ね見れ、表裡は相い應ぜんを冀^{こいねが}う。既に而して法珍は返りて處分するを得、門を閉じ仗を上げて、欣泰に兵を配せず、鴻選は殿内に在り亦た敢えて發せず。寶寅は杜姥宅に至（続、去×）り、日は已に暝く、城門は閉じる。城上の人^そは外の人を射、外の人^そは寶寅を棄てて潰え去る。寶寅も亦た逃げる^そこと、三日、乃ち戎服して草市尉（城門の外の市の監督官）に詣り、尉は馳せて以て東昏に啟す。東昏は寶寅を召して宮に入れて之を問い、寶寅は涕泣して稱す、

「爾^その日は何人か知らず、逼りて上車せ使しむ、仍て將い去り、制せられて自由ならず。」

東昏は笑い、其の爵位を復す。張欣泰等は事覺われ、胡松と皆な伏して誅す。

【蕭衍は遂に郢城を墮とす】

■ **【蕭衍は加湖を攻略】** 蕭衍は征虜將軍の王茂、軍主の曹仲宗等をして水漲つるに乗り舟師を以て加湖を襲わ使め、鼓噪して之を攻める。丁酉（5日）、加湖は潰え、吳子陽等は走りて免れ、將士の殺され溺死する者は萬計、其の餘衆を俘として而して還る。是に於いて郢、魯の二城は相い視て氣を奪われる。

●乙巳（13日）、柔然は魏邊を犯す。

■ **【魯山城は降る】** 魯山は糧に乏しく、軍人は磯頭に於いて細魚を捕り食に供し、密かに輕船を治め、將に夏口に奔らんとし、蕭衍は偏軍を遣わして其の走路を斷つ。丁巳（25日）、孫樂祖は窘迫し、城を以て降る。

■ **【包圍二百余日郢城は降る】** 己未（27日）、東昏侯は程茂を以て郢州刺史と為し、薛元嗣を雍州刺史と為す。是の日、茂、元嗣は郢城を以て降る。郢城之初めて圍まるる也、士民の男女は十萬口に近し。閉門して二百餘日、疾疫は流腫（毒氣流注し浮腫する）し、(8-277P) 死者は什に七八、屍を床下に積み而して其の上に寝ね、比屋皆な滿つ。茂、元嗣等は議して出で降らんとし、張孜をして書を為して衍に與え使む。

張沖（明帝の時、青冀二州の刺史）の故吏の青州の治中の房長瑜は、孜に謂って曰く、

「前の使君は忠は昊天を貫き、郎君は但だ當に坐して畫一（漢書、薰何は法を為り、較として一を畫するが若し、守りて失うなし。此れ守りて失うなきの義を取る）を守り析薪を荷なう（父の業を継ぎこれを失わない。左傳に曰く、其の父薪を析き、其の子負荷する克はずと）べし、若し天運は與^{くみ}せざれば、當に幅巾して命を待ち、下は使君に従うべし。今諸人之計に従えば、唯だ郢州の士女が高山之望（詩曰く、高山は仰ぐと。高德あれば慕いてこれを仰ぐなり）を失うに非らず、亦た恐らく彼（蕭衍）の取らざる所とならん也。」

孜は能く用いず。蕭衍は韋睿を以て江夏太守と為し、郢の府事を行わしめ、死者を収め瘞^{えい}（埋葬）し而して其の生きる者を撫（続、無×）し、郢人は遂に安ず。

■ **【蕭衍の直行作戰を張弘策が立案】** 諸將は夏口に頓軍せんと欲す。衍は以て為す、

「宜しく勝ちに乗りて直ちに建康を指すべし」

車騎咨議參軍の張弘策、寧遠將軍の庾域は亦た以て然りと為す。衍は衆軍に命じて即日道に上がり（上陸して）、江に縁いて建康に至らしむ、凡そ磯、浦、村落、軍行の宿次、立頓の處所は、弘策は逆^{あらかじ}めに圖畫（計画）を為し、目の中に在るが如し。（胡三省曰く、鄧魯未だ克たざるや、蕭衍は則ち衆議に違いて兵を漢口に駐めて、軽々しく進まざるは、万全を図るなり。鄧魯既に克つや、衍は遂に諸軍を督し、直に建康を指すは勝勢に乗じるなりと）

●辛酉（29日）、魏は大赦す。

●魏の安國の宣簡侯王の肅は壽陽にて卒し、侍中、司空を贈る。初め、肅は父（王奐の死は138卷武帝永明十一年にあり）の死の、命に非ざるを以て、四年喪を除かず。高祖は曰く、
「三年之喪は、賢者は敢えて過ぎず。」

肅に祥禫之禮（朞にして小祥し、再朞にして大祥し、大祥の後、中月にして禫す）を以て喪を除くを命ず。然れども肅は猶ほ素服し、終身樂を聽かず。

■〔蕭衍に付く者相次ぐ〕汝南（晉末に汝南の郡民は夏口に流遇す。よって立てて汝南県となし、江夏の太守の治所となす）の民の胡文超は潯陽（安陸の東界を分けて江夏郡に属す、湖北省江漢道安陸県、現・孝感市安陸市）に兵を起こして以て蕭衍に應じ、義陽、安陸等の郡を取り、以て自ら效さんを求める。衍は又た軍主の唐修期を遣わして隨郡（晉武帝は南陽・義陽を分かちて立て、荊州に属す。後に郢州に属し雍州に属したまひ郢州に属し、当時司州に属す。湖北省江漢道隨県、現・隨州市隨県）を攻めしめ、皆な之に克つ。司州刺史の王僧景は子の貞孫（続はなし）を遣わして衍の質と為し、司部（司州刺史の部する所）は悉く平らぐ。

■〔崔偃の再々の上書〕崔慧景之死する也、其の少子の偃は始安内史と為り、逃げ潜りて免るるを得る。西台の建つに及びて、偃を以て寧朔將軍と為す。偃は公車門に詣りて上書して曰く、

「臣は竊に惟^{おも}うに高宗之孝子忠臣而して昏主之亂臣賊子なる者は、江夏王（寶玄の誅殺は前卷前年にあり）と陛下と、先臣と鎮軍とは是れ也。成敗は術を異にすると雖も而も由る所は方を同じくす。陛下は初めて至尊に登り、天と合符す。（8-278P）天下は纖介之屈、尚ほ陛下の之を申べるを望み、況んや先帝之子で陛下之兄にして、行う所之道は、即ち陛下の由る所なるを哉！此くは尚ほ恤^{あわれ}ま弗れば、其の餘は何を冀^{こいねが}わん！今小民之識無きを幸として而して之を罔（非道に人を欺く）う可からず。若使曉然として其の情節を知り、相い帥いて而して逃げれば、陛下は將に何を以て之に應ずる哉！」

事寢^{やす}みて、報ぜず。偃は又た上疏して曰く、

「近ごろ冒して江夏之免を陳ずるは、敢えて父子之親を以て而して至公之義を傷つけるに非ず、誠に聖朝の然る所以の之意を曉^{さと}らず。若し『狂主を以て狂と雖も、而して實に是れ天子なり、江夏は賢と雖も、實に是れは人臣なり、先臣は人臣を奉じて人君に逆らうは不可と為す』ならば、未だ審ぜず（いぶかしい）、今之嚴兵勁卒は方（続は直）に象魏（闕）を指す者は、其の故は何ぞ哉！臣の死せずして、苟くも視息を存す（生活するなり。人は目見る能わず、氣また息せざるときは死す）所以は、它の故が有るに非ず、皇運之開泰を待ち、忠魂之枉屈を申べる所以なり。今皇運は已に開泰する矣、而るに社稷に死す者は返りて賊臣と為り、臣は何ぞ此を用いて陛下之世に生きる矣！臣は謹しんで案ずるに鎮軍將軍の臣の穎青、中領軍の臣の詳は、皆な社稷之の臣也、同じく先臣が江夏に股肱とし、王室を匡濟せんとし、天命は未だ遂げず、主は亡びて與に亡びるを知る。而るに陛下の為に瞥然（暫く見る）の一言せず。知りて而も言わざれば、忠ならず。知らずして而して言わざれば、智らざる也。如し『先臣、江夏に遣使して之を斬る』と以てせば、則ち征東之驛使（王天虎を斬り、以て山陽を詐る事、前卷前年にあり）は、何んぞ戮せ見れると為るや？陛下は征東之使を斬り、

實に山陽を詐るなり。江夏は先臣之請を違え、實に孔矜を謀る。天命は歸する有り、故に事業は遂げざる耳。臣言する所は畢^おわる矣、湯鑊（大きな釜、釜ゆでの刑）に就くを乞う！然れども臣は萬没すると雖も、猶ほ願はくは陛下は必ず先臣に申すべし。何となれば則ち惻愴（哀傷）し而して之を申せば、則ち天下は伏す。惻（続、則×）愴して而して之を申べざるときは、則ち天下が叛けばなり。先臣之忠は、有識の知る所、南、董（齊の南史と晉の董狐）之筆は、千載に期す可く、亦た何ぞ陛下の屈して申べるを待ちて而して褒貶を為さんや！然れども小臣の惓惓之愚は、陛下の計を為す耳。」

詔して報じて曰く、

「具^{つがさ}（続、其×）に卿の惋（恨）切之懷^{おもい}を知り、今當に顯かに贈諡を加えるべし。」

偃は尋ぎて下獄して死す。

■八月，丁卯（5日），東昏侯は輔國將軍の申胄を以て豫州事を監せしむ。辛未（9日），光祿大夫の張琬を以て石頭に鎮ぜしむ。

■蕭衍は尋陽に至る 初め，東昏侯は陳伯之を遣わして江州に鎮ぜしめ、以て吳子陽等の聲援（続、授×）と為さしむ。子陽等は既に敗れ、蕭衍は諸將に謂って曰く、

「用兵は未だ必ず實力を須^またず、聽く所は威聲ある耳。今陳虎牙は狼狽（続、狼×）して尋陽に奔り歸り、人情の理は當に恟懼し、檄を傳えて而して定む可き也。」

乃ち命じて俘囚を搜さしめ、伯之の幢主の蘇隆之を得（8-279P）、厚く賜與を加え、伯之を説か使め、即ち用いて安東將軍、江州刺史と為すを許（続、計×）す。伯之は隆之を遣わして命を返し、歸附を許すと雖も、而して云う、

「大軍は未だ須らく遽^{にわか}に下るべからず。」

衍は曰く、

「伯之の此の言は、意は首鼠（穴から首を出して様子を覗う鼠）を懷^{いだ}く。其の猶豫するに及び、急に往きて之に逼れば、計りて出でる所は無く、勢い降らざるを得ず。」

乃ち鄧元起に命じて兵を引いて先ず下らしめ、楊公則は徑^{ただち}に柴桑（漢の豫章郡の県、晉には武昌県、晉惠帝は尋陽郡を立て柴桑に治す、江西省潯陽道九江県西南、現・九江市潯陽区）を掩はしめ、衍は諸將と次を以て進路す。元起は將に尋陽に至り、伯之は兵を収めて退きて湖口（彭蠡湖の江に入る口、江西省潯陽道湖口県、現・九江市湖口県）を保ち、陳虎牙を留めて湓城を守らしむ。選曹郎の吳興の沈瑀は伯之を説いて衍を迎えしむ。伯之は泣いて曰く、

「余の子は都に在り、愛せざる能わず。」

瑀は曰く、

「然らず。人情は匆匆として、皆な計を改めるを思う。若し早く圖らざれば、は散じて合し難し。」

丙子（14日），衍は尋陽に至り、伸之は甲を束ねて罪を請う。初め，新蔡太守の席謙の父の恭穆は鎮西司馬^な為り、魚復侯の子響の殺す所と為る（137 卷武帝永明八年にあり）。謙は伯之に従いて尋陽に鎮し、衍の東下を聞き、曰く、

「我が家は世々は忠貞なり、殞^{たお}るる有りても二あらず。」

伯之は之を殺す。己卯（続、17日、乙卯×），伯之を以て江州刺史と為し、虎牙を徐州刺史と為す。

■魯休烈、蕭瑒の反撃 魯休烈、蕭瑒は劉孝慶等を峽口に破り、任漾之は戦死す。休烈等は進みて上明に至り、江陵は大いに震える。蕭穎胄は恐れ、馳せて蕭衍に告げ、（蕭衍をして）楊公則を遣わして還りて根本^{たす}を援け令む。衍は曰く、

「公則は今流れを溯って江陵に上れば、至ると雖も、何んぞ能く事に及ばんや！休烈等は烏合之衆にして、尋ぎて自ら退散し、正に須らく少時持重すべき耳。良く兵力を須てば、兩弟（蕭偉は雍州の事を総べ、儼は壘城を守る）は雍に在り、指遣往征（上の指を以て使いを遣わして往きて兵を徴するなり）すれば、至り難しと為さず。」
穎宵は乃ち軍主の蔡道恭を遣わして節を假して上明に屯し以て蕭琬を拒ましむ。

■辛巳（19日）、東昏侯は太子の左率（左衛率）の李居士を以て西討諸軍事を總督し、新亭に頓ぜしむ。

■「蕭衍は紹叔を補給の任」九月，乙未（4日），蕭衍に詔して若し京邑を定めれば，便宜を以て事に從うを得らしむ。衍は驍騎將軍の鄭紹叔を留めて尋陽を守らしめ，陳伯之と與に兵を引いて東に下り，紹叔に謂って曰く、

「卿は、吾之蕭何、寇恂（漢高帝は蕭何に委ねるに關中を以てし、光武・寇恂に任ずるに河内を以てし、餽餉を給せしむ、漢記にあり）也。前塗に捷たざれば、我は當に其の咎あり。糧運が繼かずば、卿は其の責に任ぜよ。」

紹叔は流涕して拜辭す。建康に克つに比るまで、紹叔は江、湘の糧運を督し、未だ嘗て乏絶せず。

●魏の司州牧の廣陽王の嘉は洛陽の三百二十三坊，各方三百歩を築くを請い，曰く、

「暫く勞有りと雖も，奸盜永く息まん。」

丁酉（6日），詔して畿内の夫の五萬人を發して之を築き，四旬に而して罷む。（8-280p）

●「于氏の隆盛」己亥（8日），魏は皇后の于氏を立てる。后は，征虜將軍の勁之女なり。勁は，烈之弟也。祖父の栗磾（魏の開國の功臣）より以來，累世貴盛にして，一皇后，四贈公，三領軍，二尚書令，三開國公あり。

■「東昏侯の迎撃体制」甲辰（統、13日），東昏侯は李居士を以て江州刺史と為し，冠軍將軍の王珍國を雍州刺史と為し，建安王の寶寅を荊州刺史と為し，輔國將軍の申胄をして郢州を監ぜしめ，龍驤將軍の扶風の馬仙琕をして豫州を監ぜしめ，驍騎將軍の徐元稱をして徐州の軍事を監ぜしむ。珍國は，廣之（高武明の三帝に歷事）之子也。是の日，蕭衍の前軍は蕪湖に至る。申胄の軍二萬人は姑孰を棄てて走り，衍は進軍し，之に據る。戊申（17日），東昏侯は後軍參軍の蕭琬を以て司州刺史と為し，前輔國將軍の魯休烈を益州刺史と為す。

■蕭衍之江、郢に克つ也，東昏侯は游騎するは舊の如し，茹法珍に謂って曰くも

「來たりて白門（建康城の西門）の前に至るを須ち，當に一決（決戦）せん。」

衍が近道に至り，乃ち兵を聚めて固守之計を為し，二尚方、二冶（建康の左右尚方と東西冶）の囚徒を簡んで以て軍に配す。其の活く可からざる者は，朱雀門の内に於いて日に百餘人を斬る。

■「蕭衍は江寧の攻防戦を制する」衍は曹景宗等を遣わして進みて江寧に頓す。丙辰（25日），李居士は新亭（江寧を去る十里）より精騎一千を選んで江寧に至る。景宗は始めて至り，營壘は未だ立たず，且つ師は行くこと日久しく，器甲は穿弊す。居士は望みて而して之を輕んじ，鼓噪して直ちに前んで之に薄る。景宗は奮撃して，之を破り，因って勝ちに乗って而して前み，逕に阜茨橋に至る。是に於いて王茂、鄧元起、呂僧珍は進みて赤鼻邏に據り，新亭の城主の江道林は兵を引いて出戦し，衆軍は之を陳に於いて擒にす。衍は新林（建康城から二十里）に至り，王茂に命じて進みて越城に據らしめ，鄧元起をして道士墩に據らしめ，陳伯之をして籬門（西籬門）に據らしめ，呂僧珍をして白板橋に據らしむ。李居士は之を覘（統は覗い知る）て僧珍の衆少なしとし，鋭卒萬人を帥いて直ちに來たりて壘に薄る。僧珍は曰く、

「吾の衆は少なく，逆え戦う可からず，遙かに射る勿かる可し，塹裡に至るを須ち，當に力を並（統は併）せて之を破らん。」

俄に而して皆な塹を越え柵を抜く。僧珍は人を分けて城に上らせ、矢石は俱に發し、自ら馬歩三百人を帥いて其の後に、城上の人（続は無し）は復た城を逾えて而して下り、内外に奮撃し、居士は敗れ走り、其の（続による）器甲を獲取するは計るに勝る可からず。居士は東昏侯に請いて、南岸の邑屋を焼き以て戰場を開く。大航より以西、新亭以北は皆な盡く。衍の諸弟（前卷前年にあり）は皆な建康より自ら抜けて軍に赴く。

■ 〔東昏侯と蕭衍の全軍激突〕 冬，十月，甲戌（13日），東昏侯は征虜將軍の王珍國、軍主の胡虎牙を遣わして精兵十萬餘人を將して朱雀航の南に陳ぜしめ、宦官の王寶孫は白虎の幡を持ちて督戦し、航を開き水を背にして、以て歸路を絶つ。衍の軍は小さく卻（しりぞ）（続は却）き、王茂は馬を下り、單刀直前し、其の甥の韋欣慶は鐵纏槩（鐵線で稍把を覆う槩）を執り以て之を翼け、（8-281P）東軍を衝擊し、時に應じて而して陷す。曹景宗は兵を縱ちて之に乗り、呂僧珍は火を縱ちて其の營を焚き、將士は皆な殊に死戦し、鼓噪は天地を震わす。珍國等の衆軍は抗す能わず、王寶孫は諸將帥を切罵し、直閣將軍の席豪は憤を發し陳を突きて而して死す。豪は、驍將也、既に死するや、士卒は土崩す、淮に赴きて死する者は無數にして、積屍は航と等しく、後に至る者は之に乗じて以（続は無し）て濟る。是に於いて東昏侯の諸軍は之を望みて皆な潰える。衍の軍は長驅して宣陽門に至り、諸將は營（続による）を移して稍前む。

■ 〔蕭衍は陳伯之を脅して初めて異志無し〕 陳伯之は西明門（建康西門）に屯し、城中より降人の出でる有る毎に、伯之輒ち呼びて與に耳語す。衍は其の復た翻覆を懷くを恐れて、密かに伯之に語って曰く、「城中は甚だ卿の江州を擧げて降るを忿り、刺客を遣わして卿に中てんと欲すを聞く、宜しく以て慮と為すべし」。

伯之は未だ之を信ぜず。東昏侯の將の鄭伯倫の來たり降るに會し、衍は伯倫をして伯之を過り、謂って曰わ使む、

「城中は甚だ卿に忿り、信を遣わして卿を封賞を以て誘わんと欲す、卿が復た降るを須ちて、當に生きながら卿の手足を割くべし。卿が若し降らざれば、復た刺客を遣わして卿を殺さしめんと欲す。宜しく深く備えを為すべし。」

伯之は懼れ、是れより始めて異志無し。

■ 〔蕭衍は建康の城を包圍〕 戊寅（17日），東昏の寧朔將軍の徐元瑜は東府の城を以て降る。青、冀二州刺史の桓和は入り援け、東宮に屯す。己卯（18日），和は東昏を詐（続、詐×）りて、雲わく、「出でて戦わん」、

因りて其の衆を以て來たり降る。光祿大夫の張瑰は石頭を棄てて宮に還る。李居士は新亭を以て衍に降る、琅邪城主の張木も亦た降る。壬午（21日），衍は石頭に鎮し、諸軍に命じて六門を攻めしむ。東昏は門内の營署、官府を焼き、士民を驅り逼り、悉く宮城に入れしめ、閉門して自ら守る。衍は諸軍に命じて長圍を築いて之を守る。

■ 〔楊公則の湘州人の奮闘〕 楊公則は領軍府に屯し壘の北樓、南掖門と相い對す、嘗て樓に登りて戦を望む。城中遙かに磨蓋を見、神鋒弩を以て之を射る、矢は胡床を貫き、左右は色を失う。公則は曰く、「幾ど吾が脚に中たらんとす！」

談笑して初めの如し。東昏は夜勇士を選んで公則の柵を攻めしめ、軍中は驚擾す。公則は堅く臥して起きず、徐ろに命じて之を撃たしめ、東昏の兵は乃ち退く。公則の所領は皆な湘州人にして、素より怯懦と號し、城中は之を輕んじ、出で蕩する毎に、輒ち先ず公則の壘を犯す。公則は軍士を奨厲し、克獲は更に多し。

■ 【京口など諸鎮の降伏】 是より先、東昏は軍主の左僧慶を遣わして京口に屯ぜしめ、常僧景をして廣陵に屯ぜしめ、李叔獻をして瓜步に屯ぜしむ。申胄の姑孰より奔り歸るに及び、破墩（破岡と曲阿の界にあり、曲阿は江蘇省金陵道丹陽県、現・鎮江市丹陽市）に屯ぜしめ、以て東北の聲援と為す。是に至り、衍は遣使して曉諭せしめ、皆な其の衆を帥いて來たり降る。衍は弟の輔國將軍の秀を遣わして京口に鎮ぜしめ、輔國將軍の恢をして破墩に鎮ぜしめ、從弟の寧朔將軍の景（本名は日の下に丙、李延壽は南史をつくり、唐の廟諱を避けて景とする）をして廣陵に鎮ぜしむ。

● 【魏の北海王の詳と於忠】 十一月，丙申（6日），魏は驃騎大將軍の穆亮を以て司空と為す。丁酉（7日），北海王の詳を以て太傅と為し、司徒を領せしむ。初め、詳は彭城王の勰の司徒を奪わんと欲し、故に譖りて而して之を黜す。(8-282p)既に而して人の己を議すを畏れて、故に但だ大將軍と為り、是に至つて乃ち之に居る。詳は貴盛にして翕赫（^{きゅうかく}容貌が盛ん）、將作大匠（建設大臣）の王遇（443-504 宦官、建築家）は多く詳の欲する所に隨い、私に官物を以て之に給す。司空長史の於忠は遇を責めて詳の前に於いて曰く、

「殿下は、國之周公なり、王室の阿衡（殷の伊尹の如し）なり、須^{もち}いる所の材用は、自ら應に旨（上旨）に關すべきなり。何の阿諛して勢に付き、公を損して私を惠するに至る也！」

遇は既に蹶躅（^{しゅくせき}恭にして自ら安んぜざる貌）たり、詳は亦た慚謝す。忠は毎に鯁直を以て詳の忿る所と為り、嘗て忠を罵って曰く、

「我は前に在りて爾（汝）の死を見るを憂い、爾が我が死する時を見るを憂えざる也！」

忠は曰く、

「人の世に生きるは、自ら分を定める有り。若し應に王の手に於いて死すならば、避けても亦た免れず。若し其の爾^{しか}らずば、王は能く殺さず！」

忠は咸陽王の禧を討つ功を以て、魏の郡公に封じられ、散騎常侍に遷り、武衛將軍を兼ねる。詳は忠の之を表讓（上表して辭讓する）する際に因りて、密かに魏主に忠を以て列卿と為すを勧め、左右に解き、其の上爵を聽か令め、是に於いて詔して其の封を停め、太府の卿に優進す。

■ 【蕭穎胄の病死と蕭瑰・魯休烈の降参】 巴東の獻武公の蕭穎胄は蕭瑰と蔡道恭が相い持ちて決せずを以て、憂憤して疾と成る。壬寅（続、10日）、卒す。夏侯詳は之を秘し、其の書に似たる者に假に教命を為らしめ、密かに蕭衍に報じ、衍も亦た之を秘す。詳は雍州に徵兵し、蕭偉は蕭憺を遣わして兵を將いて之に赴かしむ。瑰等は建康の已に危きを聞き、衆は懼れて而して潰え、瑰及び魯休烈は皆な降る。乃ち穎胄の喪を發し、侍中、丞相を贈る。是に於いて衆望は盡く衍に歸す。夏侯詳は蕭憺と共に軍國に參するを請い、詔して詳を以て侍中、尚書右僕射と為し、尋^もぎて使持節、撫軍將軍荊州刺史に除す。詳は固く憺に譲り、乃ち憺を以て荊州の府州事を行わしむ。

【魏は襄陽攻略を企画】

● 【魏の圜丘】 魏は改めて圜丘（齊明帝建武二年に、魏孝文は圜丘を委粟山に定める。これを改め、洛陽の南に・伊水の北に立つ）を伊水之陽に築く。乙卯（23日）、始めて其の上に祀る。

● 【魏の南征伐論諸々】 魏の鎮南將軍の元英は上書して曰く、

「蕭寶卷は驕（続は荒）縦にして日甚しく、無辜（^{むこ}とが無し）を虐害す。其の雍州刺史の蕭衍は東に秣陵を伐ち、土を掃き兵を興し、流れに順いて而して下る。唯だ孤城（襄陽の空虚なり）有り、更に重衛無く、乃ち皇天我に授ける之日にして、曠世（続。載×）にして一逢之秋なり。此れ而して乗らざれば、將に何を待たん

と欲するや！臣は躬ら歩騎三萬を帥いるを乞い、直ちに沔陰（襄陽は河の南にあり、水南を陰と為す）を指し、襄陽之城に據り、黒水（南郷の北山より出て南流して漢水に入る。元英は蓋し襄陽を得るときは梁州の道途絶するを謂う）之路を斷たん。昏虐の君臣、自ら相い魚肉とならん。我は上流に居り、威は遐邇に震わん、長驅して南に出で、進みて江陵を拔けば、則ち三楚（太史公曰く、楚に三俗あり。淮・沛・陳・汝南・南郡は四楚、彭城以北・東海・呉・廣陵は東楚、衡山・九江・江南・豫章・長沙は南楚）之地は一朝にして收む可く、(8-283p)岷、蜀之道（襄陽を取れば建康への道）は自ら斷絶と成る。又た揚（魏の揚州は壽陽に治す）、徐二州に命じて聲言を俱に舉げれば、建業は窮蹙（きゆうしよく、極まる）し、魚は釜の中に遊ぶごとく、以て文軌を齊し（天下統一）而して大同するを以て、天地は混じりて而して一と為る可し。伏して惟うに陛下は獨り聖心を決し、疑議を取る無かれ。此の期を脱し爽わば、併吞は日無し（永久に齊を併合することを得ず）。」

事は寝ねて報ぜず。

●車騎大將軍の源懷は上言す、

「蕭衍は内に侮り、寶卷は孤危にして、廣陵、淮陰等の成は皆な得失を觀望す。斯れ實に天上の期と啟し、併吞之會（機會）なり。宜しく東西に齊しく舉げ、以て席捲之勢を成すべし。若し蕭衍をして濟に克ち、上下同心せ使むれば、豈に惟（俗は唯）だ後圖之難きのみならんや、亦た揚州の危逼を恐れる。何となれば則ち、壽春之建康を去る才に七百里、山川水陸は、皆な彼の諳んずる所なり。彼が若し内外に虞無く、君臣の分が定まれば、舟に乗り水に藉り、倏忽（たちまち）而して至れば、未だ當たり易からず也。今寶卷の都邑には土崩之憂有り、邊城は繼援（続、援×）之望み無く、江表を廓清（肅正）するは、正に今日に在り。」魏主は乃ち任城王の澄を以て都督淮南諸軍事、鎮南大將軍、開府儀同三司、揚州刺史と為し、經略を為さ使む。既に而して果たさず。懷は、賀（禿髮渾犢の子、魏に入り源姓）之子也。（胡三省はこの二氏の提案を実行していれば、侯景の乱を待たずに併合出来たと）

●[田益宗も南伐を上表] 東豫州刺史の田益宗は上表して曰く、

「蕭氏は常を亂し、君臣は交々爭い、江外（西陽以西は蕭衍に付く）の州鎮は、中に分けて兩（蕭衍と建康）と為り、東西は抗峙（拮抗對峙）し、已に歲時を淹しくす。民庶は轉輸に窮し、甲兵は戰鬥に疲れ、事は目前を救い、力は麾下に盡き、外州鎮を維ぎ、庶方を綱紀する暇無く、藩城は棋立し、孤り存し而して已む。機に乗りて電掃し、彼の蠻疆を廓かざれば、恐らくは後之經略は、未だ此よりも易からず。且つ故（續は無し）の壽春は平らかなりと雖も、三面は仍ち梗（塞がる、強い）す、鎮守之宜は、實に須らく豫め設けるべし。義陽は差淮源に近く（淮水は南陽平氏県より出て東北に桐柏山を過ぎ東して義陽県を経る）、津要を渉るに利ありて、朝廷が師を行くには、必ず此の道に由るべし。若し江南が一に平らげば、事は淮外に有り（蕭衍が江南を平定すれば必ず淮外に来る）、須らく夏水の汎長に乗り、舟を長淮に列すべし（江南の用兵の常道）。師は壽春に赴くに、須らく義陽之北に従い（魏の帥の常道）、（義陽は）便ち是れ我の喉要に居り、慮りに在りて彌々深し。義陽之滅ぶるは、今實に時かな矣。彼を度るに精卒一萬二千を須いるに過ぎず。然れども行師之法は、形勢を張るを貴ぶべし。請う、兩荊（魏の荊州・東荊州）之衆をして西に隨、雍（隨郡・義陽）を擬せしめ、揚州之卒をして建安に頓せ使め、三關之援を捍ぐを得る。然る後二豫（魏の豫州・東豫州）之軍は直ちに南關（陰山關）に據り、(8-284p)延頭（安陸の界にあり）に對抗し、一都督を遣わして諸軍の節度を總べしめ、季冬に師を進め、春末に至る迄、十旬に過ぎずして、克つは之れ必ずなる矣。」

元英は又た稱を奏す、

「今寶卷は骨肉相殘し、藩鎮は鼎立す。義陽は孤絶し、王土に密邇し、内に兵儲之固め無く、外に糧援之

期無く、此れ乃ち焚けんと欲する之鳥なり、薪を去る可からず、首を授ける之寇、豈に斧を緩める容けんや！若し此を失いて取らざれば、豈に惟だ後舉は圖り難きのみになるや、亦た恐らくは更に深患と為る。今豫州刺史の司馬悦は已に戒嚴して發するに垂々とし、東豫州刺史の田益宗の兵は三關を守る、軍司を遣わして之が節度と為すを請う。」

魏主は乃ち直寢（寢殿に直する官）の羊靈引を遣わして軍司と為す。益宗は遂に入寇す。建寧（宋に建寧左郡あり、孝武大明八年省きて建寧県とし、西陽郡に属す。後また郡、湖北省江漢道麻城県の西南、現・黄冈市麻城市）太守の黃天賜は益宗と赤亭（宋文帝元嘉 25 年豫部の蠻民を以て 28 県よを置く、その一つ、江漢道麻城県の西南、現・黄冈市麻城市）に於いて戦い、天賜は敗績す。

【建康の東昏侯の殺害】

■ 〔東昏侯は王珍國に軍事委任〕 崔慧景之建康に逼る也、東昏侯は蔣子文を拜して假黃鉞、使持節、相國、太宰、大將軍、錄尚書事、揚州牧、鐘山王と為す。衍の至るに及び、又た子文を尊びて靈帝と為し、神像を迎えて後堂に入れ、巫をして禱祀して福を求め使む。城の閉じるに及び、城中の軍事は悉く王珍國に委ねる。兖州刺史の張稷は入りて京師を衛る、稷を以て珍國の之副と為す。稷は、瑰（特に光祿大夫）之弟也。

■ 〔東昏は武を好む〕 時に城中の實甲は猶ほ七萬人、東昏は素より軍陳を好み、黃門と、刀敕及び宮人は華光殿の前に於いて戰鬥を習い、詐りて創を被るの勢いを作し、人をして板を以て岡（手偏に岡の字）去せ使め、用て厭勝と為す。常に殿中にて戎服し、騎馬して出入りし、金銀を以て鎧冑の具裝と為し孔翠（孔雀翡翠）を以て飾る。晝眠りて夜起き、一に平常の如し。外の鼓叫の聲を聞き、大紅の袍を被り、景陽樓の屋上に登りて之を望み、弩は幾ど之に中たらんとする。

■ 〔包囲された東昏侯〕 始め、東昏は左右と謀り、以為らく陳顯達は一戦して即ち敗れ、崔慧景は城を圍みて尋ぎて走る。衍の兵も亦た然ると謂い、太官に敕して樵、米を辦ずるに百日の調（算度、用意）と為し而して已む。大桁之敗れるに及び、衆情は兇懼す。茹法珍等は士民の逃潰を恐れ、故に閉城して復た出兵せず。既に而して長圍は已に立ち、塹柵は嚴かに固める。然る後に出でて蕩し、屢々戦するも捷たず。

■ 〔東昏は賞賜せず〕 東昏は尤も金錢を惜しみ、肯て賞賜せず。法珍は叩頭して之を請い、東昏は曰く、「賊は來たりて獨り我を取らん邪！何為んぞ我に就きて物を求めるや！」

後堂は數百具の榜（材木）を儲え、啟して城防と為さんとす。東昏は留めて殿を作らんと欲し、竟に與えず。又た御府を督して三百人に精伏を作らしめ、圍みの解くを待ちて以て屏除に擬す。金銀雕鏤雜物は、倍々常よりも急なり。衆は皆な怨んで怠け、為に力を致さず。外の圍みは既に久しく、城中は皆な早く亡げるを思い、敢えて先ず發す莫し。

■ 〔遂に東昏の殺害〕 茹法珍、梅蟲兒は東昏に説いて曰く、

「大臣は意を留めず、圍み解かざら使む、宜しく悉く之を誅すべし。」

王珍國、張稷は禍いを懼れ、珍國は密かに親する所を遣わして、(8-285p) 明鏡を蕭衍に獻じ（鏡は物を照す、蕭衍が其の心を照すを欲するの意味）、衍は金を斷つて（易の大傳に曰く、二人心同じくすれば其の利は金を斷つ）以て之に報いる。兖州の中兵參軍の馮翊（統は無し）の張齊は稷之腹心也、珍國は齊に因りて密かに稷と謀り同じく東昏を弑せんとす。齊は夜に珍國を引いて稷に就かしめ、膝に造りて（席を促し俱に進み膝にいたり、以て密謀を定める）計を定め、齊は自ら燭を執る。又た計を以て後閣舍人（江左の置く官）の錢強に告げる。十二月、丙寅（6日）夜、強は密かに人をして雲龍門を開か令め、珍國、稷は兵を引いて殿に入り、御刀の豐勇之は内

應を為す。東昏は含德殿に在りて笙歌を作し、寝ねて未だ熟せず、兵の入るを聞き、北戸に趨り出で、後宮に還らんと欲すも、門は已に閉まる。宦者の黄泰平は其の膝に刀傷し、地に仆れ、張齊は之を斬る。稷は尚書右僕射の王亮等を召して殿前の西鐘の下に列坐させ、百僚をして箋に署せ令め、黄油（油を浸した絹の布、濡らさない為、蕭衍の首実検に供するため）を以て東昏（年19）の首を裹み、國子博士の范雲等を遣わして石頭に送り詣らしむ。右衛將軍の王志は歎じて曰く、

「冠は弊れると雖も、何ぞ足に加える可きや！」

庭中の樹葉を取りて之を按（両手で相い摩擦する）みて服し、偽りて悶えて、署名せず。衍は箋を覽るに志の名無し、心は之を嘉ぶ。亮は、瑩（蕭衍は引きて相國の左長史と為す）之從弟、志は、僧虔（齊の初めに台司）之子也。

■ 〔王亮の毅然とした態度〕 衍と范雲は舊（交）有り（蕭衍は范雲と同じく竟陵西部に遊ぶこと 136 卷武帝永明二年にあり）、即ち留めて帷幄に參ぜしむ。王亮は東昏の朝に在り、依違を以て容れらるるを取る。蕭衍は新林に至り、百僚は皆な問道して款を送り、亮は獨り遣わさず。東昏は敗れ、亮は出でて衍に見みえ、衍は曰く、「顛（覆）して而も扶けずんば、安んぞ彼の相を用いるや！」（論語季氏篇に孔子曰く、危うくして而も持せず、顛して而も扶けずんば、則ち將に為んぞ彼の相を用いんと。衍は引きて以て王亮を詰る）

亮は曰く、

「若し其の扶ける可くば、明公は豈に今日之舉有るや！」

城中の出ずる者は、或は劫剥（掠奪）せ被る。楊公則は親ら麾下を帥いて東掖門に陳し、公卿士民を衛り送る、故に出る者多く公則の營に由る焉。衍は張弘策をして先ず入りて宮を清め、府庫及び圖籍を封ぜ使む。時に於いて城内の珍寶は積むに委ね、弘策は部曲を禁じ勒し、秋毫も犯す無し。潘妃及び嬖臣の茹法珍、梅蟲兒、王暄之等四十一人を収めて皆に吏に屬す。

■ 〔戦後処理〕 初め、海陵王（139 卷明帝建武元年に見える）之廢さるる也、王太后は出でて鄱陽王の故第に居り、宣德宮と號す。己巳（9 日）、蕭衍は宣德太后令を以て涪陵王を追廢して東昏侯と為し、褚后及び太子の誦は並（続は竝）んで庶人と為す。衍（胡三省曰く、西台の詔を待たずして、宣德太后令を以て、高く自ら標置す。蕭衍の心を路人も知る所なり。豈に必ずしも范雲。沈約が其の端を発するを待たんやと）を以て中書監、大司馬、錄尚書事、驃騎大將軍、揚州刺史と為し、建安郡公に封ず。晉の武陵王の遵の製（続は制）を承けるの故事（113 卷晉安帝元興三年に見える）に依りて、百僚は敬を致す。王亮を以て長史と為す。壬申（12）、更めて建安王の寶寅を封じて鄱陽王と為す。癸酉（13 日）、司徒、揚州刺史の晉安王の寶義を以て太尉と為し、司徒を領せしむ。

■ 〔諸制度を元に戻す〕 己卯（19 日）、衍は入りて闕武堂に屯し、下令して大赦す。（8-286p）又た令を下す、

「凡そ昏制謬賦（賦役）、淫刑濫役は外に、詳しく前原（前に事を興すの源）を検じて、悉く皆な蕩を除く可し。其の主守散失し諸々の損耗する所は、精しく科條を立て、鹹（続は咸）して原（赦）例に従うべし。」

又た下令す、

「尚書の衆曹を通檢し、東昏の時は諸々の諍訟は理を失い、主者は淹停（停滯）し、時に施行せざる者は、精しく訊辨（訊問辨別）を加え、事に依りて奏を議すべし。」

又た下令す、

「義師を收め葬し、逆徒之死亡者を掩瘞（埋葬）すべし。」

■ 〔潘妃は縊殺す〕 潘妃は國色有り、衍は之を留めんと欲し、以て侍中、領軍將軍の王茂に問い、茂は曰く、

「齊を亡ぼす者は此の物なり、之を留めるは外議を胎すを恐れる。」

乃ち獄に於いて縊殺し、並びて嬖臣の茹法珍等を誅す。宮女の二千を以て將士に^{たま}贅う。乙酉（25日）、輔國將軍の蕭宏を以て中護軍と為す。

■ 〔豫州刺史の馬仙玘の抵抗〕 衍之東下する也、豫州刺史の馬仙玘（続は王篇に卑）は兵を擁して衍に附かず、衍は其の故人の姚仲賓をして之を説か使め、仙玘は先ず為に酒を設け、乃ち軍門に斬るを以て^{とな}徇う。衍は又た其の族の叔懷遠を遣わして之を説かしめ、仙玘は曰く、
「大義は親を滅す。」

又た之を斬らんと欲す。軍中は為に請い、乃ち免ずるを得る。衍は新林に至り、仙玘は猶ほ江西（豫州、歴陽に治し、揚子江の西）に於いて日々に運船を^{かす}抄める。衍は宮城を圍み、州郡は皆な遣使して降を請い、吳興太守の袁昂は獨り境を拒みて命を受けず。昂は、顗（義嘉の難に死す）之子也。

■ 〔袁昂の説得工作〕 衍は駕部郎（曹魏は23郎を置くの一、宋書の時には左民尚書に属す）の考城の江革をして書を為りて昂に與えて曰わ使む、

「根本は既に傾き、枝葉は安に附くや？今昏主に力を竭くし、未だ忠と為すに足らず。家門は屠滅するは、孝と謂う所に非らず。豈に翻然として圖を改めれば、自ら多く福を招くに若かるや！」

昂は復書して曰く、

「三吳の内地は、兵を用いる之所に非らず。況んや偏隅の一郡を以て、何んぞ能く役を為すや！磨旆の^{かいし}届止（至り止る）を承けてより、軍門に膝袒（^{はか}膝行肉袒）せざる莫し。惟だ僕一人は敢えて後に至る者は、政に以えらく内（自ら）に^{はか}揆（計る）るに庸素（平常白色）にして、文武は施す無く、心を獻ぜんと欲すと雖も、大師之勇を増さず。其の愚默を置くとも、^{なん}寧ぞ衆軍之威を沮まんや。幸にも將軍の含弘之大なるに^よ藉り、從容として禮を以てするを得る可し。竊に^{ひそか}以うに一餐の微施すら、尚ほ復た（続、敏昨×）^{とうえん}投殞（命を投げて身を損す）す。況んや人之祿を食して而して^{にわか}頓に一旦に忘れ、惟（続は唯）だ物議の不可なるのみに非ず。亦た明公の之を^い鄙しまんとするを恐れる、躊躇して、未だ薦壁（壁を含みて降る、薦は進む）に^{いとま}遑（暇）あらざるの所以なり。」

■ 〔袁昂は名門の出〕 昂は時事を武康（吳は烏程・餘杭を分けて永安县を立つ。晉武帝太康元年に更めて武康と名付けて吳興郡に属す、浙江省錢塘道武康県、現・杭州市余杭区）令の北地の傅映に問い、映は曰く

「昔元嘉之末は、開闢未だ有らず、故に太尉は身を殺して以て節を明らかにす（袁淑は大尉を贈られる、死すは127 卷宋文帝元嘉 30 年にあり）。司徒（昂の父顗をいう、死すは131 卷宋明帝泰始二年にあり）は寄托之重きに当たり、理は苟しくも全く無く、夷險を顧みずして以て名義に循う所以なり。今嗣主は昏虐にして、俊改無きに曾う。荊、雍は協舉し、上流に乗據し、天人之意は知る可し。（8-287p）願はくは明府は深慮し、後悔を取る無かれ。」

建康の平らぐに及び、衍は豫州刺史の李元履をして東土を巡撫せ使め、元履に敕して曰く、

「袁昂は道素之門、世々に忠節有り、天下は須らく共に之を容れるべし、兵威を以て陵辱する勿かれ。」元履は吳興に至り、衍の旨を宜す。昂は亦た降を請わず、開門して備を撤して而して已む。

■ 〔馬仙玘の降伏と重用〕 仙玘は台城の守らざるを聞き、號泣して將士に謂って曰く、

「我は人の任寄（委任）を受け、義は降る容からず、君等は皆な父母有り、我之忠臣と為り、君は孝子と為るも、亦た可からず乎！」

乃ち悉く城内の兵を遣わして出で降らしめ、餘の壯士は數十、閉門して獨り守る。俄に而して兵は入り、之を圍むに數十重なり。仙玘は士に皆な滿を持せ令め、兵は敢えて近づかず。日は暮れ、仙玘は乃ち投弓

を投げて曰く、

「諸君は但だ來たりて取ら見よ、我の義は降らず！」

乃ち石頭（続、間×）に檻送す。衍は之を釋し、袁昂が至るを待ちて俱に入ら使めて、曰く：

「天下をして二義士を見令めん。」

衍は仙玘に謂って曰く、

「鉤を射、祛（災いを払う）を斬るは、昔人の美とする所なり。卿は使を殺し運を斷つを以て自ら嫌う勿かれ。」

仙玘は謝して曰く、

「小人は主を失う犬が如く、後主は之を飼えば、則ち復た用を為す矣。」

衍は笑い、皆な之を厚遇す。丙戌（26日）、蕭衍は入りて殿中に鎮す。

■ 〔劉希祖と王僧粲の反乱〕 劉希祖は既に安成に克ち、檄を湘部に移して、始興内史の王僧粲は之に應ず。僧粲は自ら湘州刺史と稱し、兵を引いて長沙を襲う。城を去ること百餘里、是に於いて湘州の郡縣の兵は皆な蜂起して以て僧粲に應じ、唯だ臨湘（漢より長沙郡、湖南省湘江道長沙県の南、現・長沙市長沙県）、湘陰（宋蒼梧王元徽二年、益陽・湘西・羅及び巴峽の流民を分けて湘陰県を立て、湘東郡に属す、湖南省湘江道湘陰県の西北五十里、現・岳陽市湘陰県）、瀏陽（呉は瀏陽県を立て、長沙に属す、湖南省湘江道瀏陽県、現・長沙市瀏陽市）、羅（漢より長沙郡、湖南省湘江道湘陰県の界、現・岳陽市湘陰県）の四縣は尚ほ全くす。長沙人は皆な舟を泛かべて走らんと欲し、行事の劉坦は翻って悉（続による）く其の舟を聚めて之を焚き、軍主の尹法略を遣わして僧粲を拒ましめ、戦は數々利あらず。前湘州鎮軍（胡三省曰く、案ずるに当時州府の官属に鎮軍の称は無く、梁書の誤りならん）の鍾玄紹は潜かに士民數百人を結び、日を刻して城を悉（続は翻）くして僧粲に応ぜんとす。坦は其の謀を聞き、陽りて知らざると為し（表向き知らんふりして）、因って訟（うったえ）を埋めて（訴えを収めて）夜に至り、而して城門は遂に閉じず、以て之を疑わず。玄紹は未だ發せず、明旦にして、坦に詣りて其の故を問い、坦は久しく留めて與に語り、密かに親兵を遣わして其の家の書を収めしむ。玄紹は坐に在り、而して収兵は已に報じ、具に其の文書の本末を得る。玄紹は即ち首伏（続は服）し、坐に於いて之を斬る。其の文書を焚き、餘黨は悉く問う所無し。衆は愧じ且つ服し、州郡は遂に安ず。法略と僧粲は相い持つこと累月、建康の城は平らぎ、楊公則是州に還り、僧粲等は散りて走る。王丹（先に南康を以て劉希祖に應じる）は郡人の殺す所と為り、劉希祖は亦た郡を擧げて降る。公則是己に克ち廉慎（続、廉賦×）にして、刑は軽く賦は薄くす。之の頃、湘州の戸口は幾ど其の舊に復す。

令和2年4月11日 翻訳開始 11514 文字

令和2年4月27日 翻訳詳細終了 21144 文字

令和3年11月10日 書下し終了 24788 文字